

2005年 12月 26日

三井不動産株式会社
代表取締役社長 岩沙弘道 殿

社団法人 日本建築学会
会長 村上 周三

三井上高井戸運動場クラブハウスの保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

現在、貴社におかれまして進行中の杉並区高井戸東一丁目の三井上高井戸運動場を宅地開発する計画において、運動場内に立つ上記建物の取り壊しが検討されていると聞き及んでおります

御承知のように、この建物は三井合名会社の社員の厚生施設として、1936年(昭和11年)10月に総合運動場の整備とともに現在の場所に建設されたものです。戦前の旧財閥においては、上級役員の交流の場としての倶楽部建築を持つことは通常でしたが、同クラブハウスのような会社社員とその家族を対象とした厚生施設を持つ財閥は三井財閥以外になく、このことは江戸時代からの長い歴史を持つ三井財閥が他の旧財閥とは異なる会社哲学を戦前に持っていたことを示すものと言えます。換言すれば、同クラブハウスはそうした戦前の三井財閥の高邁な会社哲学を端的に示す建物と見ることができます。この建物の設計者は久米権九郎(1895年～1965年)で、設計を依頼したのは学習院の2年先輩である三井八郎右衛門高公ですが、建物が優れた設計内容を持つに至った背景には、そうした施主と建築家との間の信頼関係も大きな要因となったと考えられます。

同クラブハウスは、別紙「見解」に示します通り、久米権九郎の初期の代表作品であるとともに、戦前の日本の近代建築においても傑作と位置づけられる建物であります。竣工時から現在まで大幅な改修もなく、今後も未永く利用してゆくことが十分可能な建物であるとともに、使い続けることによって更にその地域の歴史的価値・文化的価値を高めてゆくことが間違いなく可能な建物と考えられます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、できる限り協力させていただき所存であることを申し上げます。

敬具

2005年 12月 26日

東京都杉並区
区長 山田 宏 殿

社団法人 日本建築学会
会 長 村 上 周 三

三井上高井戸運動場クラブハウスの保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

現在、三井不動産株式会社によって杉並区高井戸東一丁目の三井上高井戸運動場が宅地開発する計画が進行中であり、また運動場内に立つ上記建物の取り壊しが検討されていると聞き及んでおります

御承知のように、この建物は三井合名会社の社員の厚生施設として、1936年(昭和11年)10月に総合運動場の整備とともに現在の場所に建設されたものです。戦前の旧財閥においては、上級役員の交流の場としての倶楽部建築を持つことは通常でしたが、同クラブハウスのような会社社員とその家族を対象とした厚生施設を持つ財閥は三井財閥以外になく、このことは江戸時代からの長い歴史を持つ三井財閥が他の旧財閥とは異なる会社哲学を戦前に持っていたことを示すものと言えます。そして、上高井戸という場所は、こうした三井財閥の高邁な哲学を反映した運動場とともにその歴史を歩むことで、今日までその豊かな地域環境を保持してきた稀有な場所と言えます。そうした意味において、同クラブハウスはこの上高井戸という地域の歴史を象徴する建物と見ることができます。

同クラブハウスは、別紙「見解」に示します通り、久米権九郎(1895年～1965年)の初期の代表作品であるとともに、戦前の日本の近代建築においても傑作と位置づけられる建物であります。久米への設計依頼は学習院の2年先輩である三井八郎右衛門高公からであったと伝えられており、同クラブハウスが優れた建物として設計された背景には、こうした施主と建築家との間の信頼関係も大きな要因となったと考えられます。この建物は竣工時から現在まで大幅な改修もなく、今後も末永く利用してゆくことが十分可能な建物であるとともに、使い続けることによって更にこの地域の歴史的価値・文化的価値を高めてゆくことが間違いなく可能な建物と考えられます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、地域行政の立場から格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、できうる限り協力させていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2005年 12月 26日

三井上高井戸運動場クラブハウスについての見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 吉田 鋼 市

東京都杉並区高井戸東一丁目の三井上高井戸運動場に建つ同クラブハウスは、三井合名会社の社員およびその家族の厚生施設として、約3万坪の広大な敷地の中に1936年(昭和11年)10月に建設された。建物の構造形式は鉄筋コンクリート造、半地下1階・地上2階建てで、屋根全面を陸屋根(屋上庭園)とし、白い無装飾の壁面と四角い窓を持った近代主義的なデザインの建物であり、その意匠は端的に言って瀟洒・軽快である。延床面積は約330坪で、設計者は久米権九郎(1895年～1965年)である。

久米権九郎はドイツやイギリスで建築を学び、シュツットガルト工科大学で学位を取得して1929年(昭和4年)に帰国し、同年に渡辺仁と設計事務所を開設、やがて1932年(昭和7年)には独立して久米建築事務所(現・株式会社久米設計)を開設した。同クラブハウスは独立後まもない時期の作品であり、またこの設計依頼は小学校の頃から親交のあった三井八郎右衛門高公(1895～1992)からであったと伝えられている(2歳年上の久米権九郎の兄・民十郎と三井八郎右衛門高公が学習院の同期であった)。久米権九郎の初期の建築作品は現存例が少なく、また戦前の作品は木造和風(軽井沢万平ホテル:1936年)も含めてデザインが多様であったことから、同クラブハウスのようなモダンなデザインは、久米の初期の作品の中でも貴重なものといえる。

同クラブハウスはまた、その設計内容においてクラブハウスおよび社員の厚生施設という用途を満たしつつ、その用途に相応しいカジュアルな性格を近代主義の設計手法で表現することに成功した点において、戦前の日本の近代建築の中でも傑作として位置づけることができる。具体的には、以下のような点にデザインの多様性、瀟洒・軽快さといったこの建物の特徴を見ることができる。

1) 東面のデザイン:採光・通風・眺望の重視と開放的な立面

建物の平面計画は横長の矩形を基本とし、半地下階には更衣室・シャワー室、1階にはレストラン、2階にはクラブ室(会議室)を設けている。1階のレストランと2階のクラブ室は横長の1室大空間として東西両面に開口部を設け、いずれも東面にテラスを設けるとともに壁面を全てガラス建具とすることで室内への採光・通風と運動場への眺望を十分に確保している。同様の姿勢は、1階を高床にした点や2階をセットバックさせた点、2階のガラス建具をカーテンウォールとした点にも窺える。こうした工夫は運動場に面する建物の東側立面において、クラブハウスを水平線を強調した開放的な建物として印象付けることに成功している。

2) 北面のデザイン:ランドマークとしての階段室

建物の北面には半円形平面の階段室が設けられた。幅が細く背の高いこの階段室の壁面は、建物の北面において無装飾の白い壁面として強調され(四角い窓や時計などによってさらに強調されている)、東面の開放的な立面と明確な対比を形成している。施設を利用する社員たちには「船」のイメージで親しまれたように、このデザインは建物の北東に広がる広大な運動場から遠望されるランドマークとしてクラブハウスを印象づけている。また、この階段はスラブ構造でできているため、内部空間においては白い無重力空間のような印象を見る者に与え、内部空間においても見所の一つとなっている。

3) 西面のデザイン:半地下による視線の操作と抽象的なマスの構成

外部から訪問する利用者は、敷地西側に設けられたアプローチ動線を通り、建物西側に設けられた駐車場・エントランスから建物に入ることとなる。建物の平面を南北方向の横長平面としたことに加え、建物の西側地盤を東側よりも半階分下げたことにより、来館者はアプローチ時の動線では運動場を目にすることがなく、階段を半階分上り、主室であるレストランに入って初めて広大な東側のグラウンドを目にすることになる。このように、ここでは細長い平面計画と床段差を巧みに組み合わせて、ドラマチックな視覚的効果が生み出されている。西面の外観デザインは、水平面を強調した車寄せと小部屋の付属室の巧みな配置により、全体が白い無装飾の矩形ヴォリュームの構成としてまとめられており、東面の開放的なデザインとも北面の曲面を使ったランドマーク的なデザインとも異なる、抽象的なモダンデザインとして特徴付けられている。

